

を欺き五丁をして險要を開通せしめたる遺跡あり其中蜀山の狹隘絶峻なる處も亦尠からず其一例を指示すれ此の如き者(幻燈を示す)あり……………千仞絶壑の洞底怪岩巨石に激する溪澗の奔湍急瀬は攀攀として雷の如く響き八面崇山峻嶺は互に其秀を競ふて峙つ寔に古昔宋人元人等が揮寫せる所の山水の妙趣が宛然として眼前に躍出するを覺……………

此關(五丁關)を出て、七盤山を降れば則四川省の境にして四川省と陝西省との彼此區別は一目瞭然として辨すべし是れより又龍洞背に登り朝天驛に出づ元來四川は陝西と異にして古より富裕と稱せられ如是深山間の村里と雖も尙其從來富裕の痕迹を見る朝天驛は山間の一小驛なれども尙は且つ此の如く其人民生活の豊潤なるを推料すへきものあり(更に改寫幻燈を示す)看るべし此小驛の中に架せる所の石橋は長さ四十六間許其「アーチ」即ち穹窿の数は十九あり(即ち眼鏡)橋明朝時代の建築に係り頗る觀るべき建築術の一ツ也斯様の石橋は此他にも尙ほ蜀中に於て隨處に之を見ると尠からず深山の一小驛にしてすらも尙は且つ然りとすれば支那古代の開化其富裕の程度をも亦以て推料すべし……………

又看よ(幻燈を示す)是れは驛門にして門上に祭れる者は文昌星也門側には番兵あり此驛を経由する水は則嘉陵江の上流にして末流は遙かに重慶府に注ぎ大江に合同する者也驛を過

き朝天嶺を越し廣元縣を經有名なる千佛崖を閱し天雄關を過ぎ漸次に深く蜀中に入れり蜀道を通過して最も行人の情緒に觸るる者は玄宗の榮枯盛衰也大木樹と云へる地は玄宗か李嶠を懐ふて腸を斷ちたる古跡也「江山滿目淚沾衣富貴榮華能幾時」と吟せし李嶠の句は尋常凡庸の句なるか如きに玄宗か之を聞きて嘆息せしことを追想せしむる者は他無し眼前蜀中山水光景の然らしむる所也劍閣の如きは殊とに然りとす兩方の峻嶺は天を挿み中に一ツの劍門あるのみ其寂寥たると今日と雖も尙は太甚たし「雲棧榮廻上劍閣」白樂天長恨歌の妙は此劍閣を一見すれば寔に其能く悉くせると知る「又畫に就て之を看るも宋人の眞旨も亦此劍閣山水の天趣に外ならざると知るべき也……………劍門を経て送險亭に到れば棧道は既に盡き道路漸く平穩と爲る頭を回らして前日攀躋したる蜀門の千山萬岳を顧望すれば其光景は斯の如し(幻燈を示す)……………此に至り(送險亭)水流始めて以て灌漑に供すべく稻米水田の耕種も始めて之を行ふとを得る所あり即ち此寫眞を觀ても支那の畫伯名家の揮寫せる所の者は決して單に架空的理想を以てせるに非ずして而かも宋元の畫師其名家の揮筆は多く寫實寫生に係ると云ふとを解するに足るべき也」看よ此山骨を……………

……………彼夏珪等の筆意は此山嶺の活相より生誕し來れる者なるとを「而かも我朝周

文等の畫趣も亦此眞山水より脱胎し來れるとを知るべし此寫眞中に見ゆる所の馬は則ち吾人か彼地に於て日々之に乗り之を用ひたる所の騾馬なるとを看取せよ……………綿州より新都縣を経て成都府に出つ成都は劉玄徳の都其後歷代蜀中の首府として繁盛の地なりと雖も古の美術を觀る點に於ては吾人の豫期せる所に背き大に失望遺憾を免かれず其故は他無し成都府も曾て劫賊劇寇の禍亂に罹りたるに在り支那の都府を焚掠し貴重なる美術其の他古今寶物を勦滅せる者は嘗に長髮賊のみに止まらず就中成都の如きは明末張獻忠の亂の爲に焚掠を被り明以前の古物は大に散逸或は滅亡し而して其今日に存在する美術其他の品物は多くは康熙乾隆以後の物に係れり然れども(康熙十三年甲寅、吳三桂の大亂、四川の巡撫羅森なる者亦清朝に叛きて吳三桂に應じたる爭亂を除くの外は)成都府は幸にして戰亂に罹らざるか故に二百年來の富裕を大鉢保持して以て今日に至れる者也故を以て明末清初更迭の情態を窺ひ得べき端緒の存在する都府は此府に如くは莫し然れば古物探究の點に就ては此府に失望せりと雖も歷史上前述の事情を窺測する點に於ては成都府は實に裨益を吾人に興へたる處也とす成都府は支那大都會中有數なる者にして其市街に輳湊する人民の夥多なると所謂肩摩轂擊とも謂つへく容易に徒歩して之を通過するを得ず亦行人互に

人と衝突を避くるの暇も殆ど之れ無きとあり……………

美術品商塵とも謂ふべき者其巨大なる店舗四五十軒相隣比して府内の要處に在り又他の大街に於て吳服店四五十軒互に其軒を駢へて開舖營業する者あり是等の巨大なる商店は皆能く整然として業を營み而かも其店舗の清潔なるとは北京近傍若くは河南陝西或は南方の都市に於て多く見ざる所也故に古代の支那即ち支那の舊俗遺風を窺ふか爲には頗る便宜の場處なるへし」杜詩有名なる「丞相祠堂何處尋錦官城外柏森々」今柏樹森々たる孔明祠堂あり其隣近に昭烈帝の陵墓尙ほ盛に血食せり又祠堂の構内に杜甫の浣花草堂あり宛然として趙宋時代の風致を存留し而かも竹陰深き處に鈴を火きて歸る老僧の影は恰かも馬遠畫中の妙趣を喚起するに足れり……………成都より錦江に棹さし嘉定府に出つ東坡か「餘生願作漢嘉守」の句を吟せし處は即此府也前に凌雲寺あり寺に雅麗なる佛像を安置す岷江の流に順て下る叙州府の前に於て大江に合し瀘州を経て重慶府に達す重慶府より長江に泛ひ夔州を過くれは則有名なる瞿塘關白帝城の故址關の西は則瀘瀘堆、巫山縣に通す間即ち三峽の險にして其の江船は大鉢斯の如き者とす(幻燈を示す)峽中霧多し江船の種類に三枝五板等の區別あり吾人か乗用せしものは此幻燈の前方に在る者と大約相同し此船を棹さし怪

岩大石の罅隙を縫て降る者なるか故に急流石に激して船中忽ち水の漬たす所と爲る者屢ば乗客の困難も亦太甚だし三峽とは(一)瞿塘峽(二)巫峽(三)黄牛峽を云ふ瞿塘の峽口は兩岸絶壁千仞恰かも削り成せるか如く峻然高く聳へて上み蒼空を凌く峽中船上より仰き視れば天の細きと匹練の如しと放翁の入蜀記に記せる處即是れ也此峽中水心監踞せる大石を稱して灩澦堆と云ふ「江上篙師及舟人の俚諺に「灩澦堆が象の如くなるときは之に上るへからず灩澦馬の如きときは瞿塘登るべからず」と云へり是該堆石に激して迸湧する所の江水洶湧の狀を觀察して以て此峽上下の標準と爲すの謂にして危險頗る甚たしさと知るべし(幻燈を示す)是れは恰も灩澦堆の傍に於て撮影せるもの也……………「朝鮮白帝彩雲間」と云へる白帝城は恰かも此寫眞の端に當る其古城は既に壊滅して形影無し唯僅に山上に凸凹の城址形を望むべきのみ(幻燈を示す)此峽中に入れば兩岸絶壁相對して江流を夾む屏風(高大なる)の如し是れ(幻燈を示す)巫峽の一部分たり此邊楊子江の水は非常に増減高低あり此寫眞は秋末に際し大江の水最も涸れたるときなるを以て圖の如しと雖も夏季より仲秋に亘りて長江多水の時に在りては平水よりも増加すると二十丈以上に及ぶを常と爲すと云ふ現に其水漲溢せる痕跡は明かに此岩石の上まで存在して(幻燈を示す)見るべき也神女十二

峯は即ち是れに在り其次を黄牛峽と爲す岸上に黄牛廟あり廟後の諸山嶺峻拔にして屏風の如し其第四疊の嶺上牛の狀に類し昔し其色赤黄なりしか故に黄牛峽の名由りて起れりと云ふ「此峽を出つれば楊子江の水域豁然として開け瀛船も亦通す宜昌港より以下の事は常に上海との間に瀛船の往來通航も之れ有り從來之を旅行して熟したる人も亦多かるべきか故に之を省き別に茲に演べず

支那内地の旅行を以て危険太甚たしき者と爲すの説は從來世人の多く唱ふる所なりと雖も拙生今回の旅行に於ては決して然らざりし也蓋し支那の旅行に於て最大困難にして堪へ難き所の者は不潔に在り不潔を堪忍し得ざる人は支那内地の旅行を爲すこと殆ど難しと雖も苟くも此一事に堪へ得る以上は其他に恐怖すべきの虞無かるべきを信ず……………支那は慣習上不便なるとも亦尠からず其一二を擧ぐれば旅中必要の荷物を多量に携帯せざるを得ず是れ支那の客舎なる者には寢具絶へて無きか故に旅客自ら其夜具寢具を裝して馬或は車に馱載し以て以を携帯せざるべからざるか故也其他食物に就ても亦種々の不便多し又支那旅行者の習慣として同行者の務めて多からむとを望み面識絶無の他人と雖も之と相共に馬を連れ或は杖を連ねて客路に就くことを希望せざる莫し(幻燈を示す)此寫眞は陝西省

渭水の上流にして其先きに礮浚舊釣磯の古跡あり此津口を渡るには行客多勢待合せ組合ふて以て之を渡らざるを得ず然らざれば二人や三五人少數の行客か津口に在りて渡を呼び急促するとも舟人は敢て之に應せず以て大に客をして待たしむるを常習とす其津渡の方法は一人の老舟子か音曲を唱ひて他の舟人か之を漕ぐものなり其迂濶緩漫も亦極めて太甚たし……

支那に在ても盜寇危険の虞ある處に於ては支那流の警備あり就中著しき者は護送行旅の事也其大要は支那内地に在りて寇盜の出波行劫を事とする場處は大約豫めト知すべし亦其出沒する時期は大抵大陰曆の十一月より翌春二月頃迄の間に於てするを例とす故に此時期に際して寇盜の出沒すべきの虞ある地方村落に於ては斯寫眞の如き番兵小舎(幻燈を示す)を處々方々便宜の地に設置し其小舎の前には「嚴拿盜賊護送行旅」と云へる八大字を揭示し而して番兵二名つゝ該小舎に詰め切り其前を通過する所の旅人を保護して之を其次きの驛亭或は村落に向けて送付する規定たり然れども紀律不安心なる支那兵隊のとなれば「此護送者其者か動もすれば輒ち危険なり」との評判は吾人が會て耳にせる所也とす……
他の警備方法の一つは前述の護送よりも叮嚀なるものにして茲に兵隊の駐衛舎を設け(幻

燈を示す)十人の兵卒を置く者にして各兵員の畫像を其舎の前に揭示せり(吾人は此種の駐衛舎前を通行したると數度ありと雖も其舎中に於て眞實衛兵か屯在せる状を目撃せしとは一回も之れ有らざる也)……

此他に各地の勝景を寫したる眞影は多々之れ有りと雖も今夕は煩を省き敢て茲に贅展せず……唯茲に一ッ諸君の高覽に供するものは他に非ず華山の眞景是れ也(幻燈を示す)此眞景は華岳橋の近方に於て之を寫せる者其日生憎大霧の爲に山影をして遙遠なるが如く見せしめたるも其實は華岳橋と華山との距離は大凡そ一里許に過ぎざるものとす從來華山は非常の大山高岳と聞き居りしも實地に就て之を視れば僅かに神戸の摩耶山麓布引瀑布の山峯位に過ぎざる也然るを聞く者をして華山と云へば高崇なる大岳の如き想ひを作さしむる者は支那人文章に巧みなるの然らしむる所なることを知るべし

以上歴叙せし所は拙生が經過したる沿道大躰の概觀なり請ふ是れより拙生が此等地方の光景に對して聊か感じたる所の點を左に演べむ

茲に第一支那に就て拙生が感ぜしたる所の者は何ぞ他無し「支那に支那無し」と云ふと是也單に「支那無し」と云へば聽者或は之を嗤はむ故に語を更へて之を言はば則「支那には支那

の通性無し」と云ふと是れ也願ふに歐洲には歐洲と云ふ通性無き也之と均しく支那にも亦其通性無き也夫れ歐洲には英吉利あり佛朗西あり獨逸あり魯西亞あり然るに其數國を一貫せる所の歐洲的通性は果して何くに在る乎」と問へば之が解釋に苦しまざる者莫し支那も亦然らずや支那の事を談ずるに當りて吾人は是は漢是は唐是は宋也是は元也明也と時代上より差異を區別し得るか如く尙ほ深く支那の性質を探究稽查する時は此外に各部地方の差別よりして生ずる所の彼此特有の性質あり氣品あり而も其各省各部を通して一以て之を貫く的通性なる者を求めども之れ無きに非る乎是れ吾人か深く稽查を要する緊要問題也

蓋し支那南北東西各部地方の特質區別に關しては從來支那人も亦既に自から斯に感ずる所ありて或は「山西出將山東出相」と云ひ或は「南人北相北人南相」と稱するか如き之を要するに南北東西彼此地方に隨て其人民性質天分氣品の彼此大に相差異あるとを認識し之を論せる者も亦既に尠からざらず然れども未だ其性質に就きて精く之を論じたる者を聞かざるか如し美術上從來山水畫に就きて南宗北宗と區別して論ずるとあり畫論家の中には以爲らく是れ北方の山水は險峻なるが故に北宗茲に起り而して南方の山は穩かに其人も亦穩和なるが故に南宗隨て茲に生したる也との説を爲す者往々之れ有り然るに此説恐らくは是附會牽

強を免かれず南北兩宗の區別は恐らくは是れ禪宗より移れる稱呼にして地方區域の南北に基づきたるに非ず之を地方に基つて説く者は蓋し後世の附會なるべし」況んや其山嶺に於る南方は穩かにして北方は險阻と云ふが如きは實際に背乖せる謬説にして取るに足らざるをや故に聊か此事に就きて其南北各部彼此區別を考述する所あらむとす

按するに漢土方域古來の變遷亦太甚たしく其所謂南北なる者東西なる者亦往々古今世代に隨て名實の異同あり故に敢て之を槩論すべからず其一例を擧ぐれば……………

- (一)管子言ふ楚者山東之強國也と
- (二)史記に……………秦兼併山東諸侯三十餘郡と
- (三)後漢書に……………陛下不當都山東と
- (四)漢書に……………山東出相山西出將と

是等の山東なる者は皆雍州以東(即ち函谷以東)總べて之を稱して山東と謂へる者にして而かも近今單に齊魯の地を以て山東省と爲す者と全く相異なりとす」

彼西北の西藏即ち前藏、後藏及び外蒙古、内蒙古及び北方滿洲韃靼の如き支那の文化を直接に蒙むらざる者は姑く之を措き又雲南貴州廣西四川等の南西邊隅に住する蠻子苗族若くは

猪獷等の野蠻部落は之を除き而して全く支那の文化の中心たる支那本部に就て之を論ずるも其中幾多の差別あらむ今假りに之を大別すれば寡なくとも二様の差別あり之を南部北部と云はむも可也然れども單に南部北部と云ふは頗る漠然に流るるの恐れあるが故に之を呼びて江邊河邊の字を以てせむと欲す江邊とは即ち楊子江の兩邊にして河邊とは黄河の邊と云ふ意味なり……………

邦國民族の發達開明は常に長河海江に依らざる莫し支那も亦然り其北方及び中央は黄河に依り南方は則楊子江に依りて發達せるが故に江邊と河邊との差別は隨て百般事物（有形並に無形）に被及せる者の如し故に支那文化を論ずるには江邊と河邊との二大別を以て其要素と爲さざるを得ず而して此二要素より生來せる所の文明は彼此大に差異有ることを辨知せざるべからず今先づ山川風土に就て之を例せむ乎則左の如し

黄河の邊其兩涯平原曠野極目渺々千里又千里殆ど涯際無し僅かに遠く大行一帶山脈あるを以て其平原大野の茫漠を壓するに足らざる也而して楊子江の兩涯は之に異なり崇嶺層巒前に峙ち後に聳へ以て方域を畫するあり（固より大陸の國なるが故に河邊亦處處々に平原廣澤多しと雖も其光景自から河邊の曠濶沙漠たる者に異なり）河邊は極めて樹木に乏しく江邊

は則鬱蒼として樹木繁茂せる者多し河邊は水潤多くして空氣温暖なるも河邊は則乾燥にして冬寒酷烈なり河邊は多旱にして江邊は則多雨を常とす風土既に相異なる此の如し生活の状態も亦隨て同しからず河邊は木材無し其屋舎を構ふに材木を使ふとを得ず故に磚瓦（粗製の煉土にして真正の煉瓦に非ず）を以てせざるを得ず細民磚瓦を用ふる能はざる輩は小丘に穴を穿ちて穴居する者現在河南陝西地方到る處に極めて多し（往昔支那政府（姬周の世）司空の官は穴居の事を掌せりたると其古書に見ゆるも亦偶然に非るを知るべし）而して此穴居者亦獨り小民のみに止まらずして穴居主人に富有の民無きに非ず穴中に於て車三四輛馬十五六頭を備具し農業を營み自立の生活を保てる良民も亦徃々之有り拙生か實地目撃し且つ之か主人に應接して其景況を審察したる所也とす」之に反して江邊は竹木に饒かなるか故に快活なる家屋を建造して之に住むとを得室内空氣の流通の便宜なると北方河邊穴居或は磚瓦密閉的住居の比に非ず暗黒の處に住む者は其氣質自から粘重にして快爽に乏しきを常とし南方河邊の民は之に異なり又河邊は清澄の水に乏しく濁水は衣服器具を洗淨するに適せず故に其俗不潔なり易し楊子江邊は之に反す「黄河兩涯は灌溉の便に乏し故に其陸田に作る高粱蜀黍等に過ぎず而かも極めて勞力を費やすと多し楊子河邊は之に反し氣候

温暖にして灌漑自在故に水田收穫頗る豊饒のみならず蠶絲茶葉等の物産も亦極めて豊富なり河邊地方に在ては舟楫の利に乏しく専ら車馬を仰ぐのみなるも江邊は則然らず舟楫の利用極めて廣し支那の諺に南船北馬と云ふ熟語は簡にして盡したるもの也風土の差生活の差既に此の如くなれば則其居民の氣象も亦自から彼此相違を生せざるを得ず河邊は利少なくて勞大なり故に強健能く耐るの風を生し江邊は勞寡くして而かも生活に便多し故に俊敏巧慧の風を長ず是亦理勢の自然なるべし

支那人民の種族が幾多錯雜にして單一に非るとは古來既に已に先輩の諸説有り吾人の言を俟たざるは勿論とす獨り歴史上に於て古來幾多の異種民族が支那に入り來りて其子孫族類蕃衍増殖したる事迹の分明なるのみに止まらず現今吾人が彼國內地を經歷して之を實地に徴する時は其人種の幾多異族が錯雜して居るとは明らかにして疑無し」鷄頭關を越へて褒城縣(陝西省漢中府の縣名)及沔縣(亦漢中府の縣名)に入るときは途上に於て相遭逢する所の人の顔色が俄かに其より前に逢ふたる所の人と異なると著しきを以て恰かも別國に入りたるか如く爲に吾人をして驚愕せしむるに至る此事實を以て北京其他北方人人に話すれば常に之か説を爲し曰く南人は色曰く肉瘦せ而かも軀幹豊偉長大なる人無しと」其言頗る實

に近きを覺ゆ此點は誰ありて南北彼此の差異著しきとを感覺せざる者無かるべし……

蓋し河邊の人は大槩長身隆準にして顴骨高く眼皆亦軒昂せり江邊人は之に異なり其身幹中庸にして眼は纖長其眦は平行せり鼻も亦北人に比すれば低きを常とす故に南北の差別は一見して瞭然之を推判するに通からざるか如し數千年來の支那人民にして祖先以來今に至る迄南北人種の差別が此の如くなる所以は其原因多々あるべしと雖も其一つは他無し支那人民が婚姻するに可成的其同郷同縣乃至同州郡の人を選ぶと多きを以て血屬の混亂自から寡きと(イ)祖先墳墓の地を重んじ敢て容易に他國他省に永轉せず他郷萬里の外に於て客死する場合と雖も亦必ず其柩を其本國桑梓墳墓の地に歸葬するを例とすると(ロ)従前四方の交通甚だ不便なると(ハ)等に在るが如し」尙ほ有力なる他の原因は言語に在り支那の言語が紛として錯雜なるとは世人の既に稔聞して知る所なるが此錯雜は固より近時に始まりたるとに非ず陳良は楚國の豪傑而して孟子其言語の南蠻缺舌を斥け仲由の言語は孔門に於て嗟の謗りを免かれず公羊傳には齊の方言多く淮南子は楚語多し東晋中興の良相たる王導及び大將軍王敦當時の名士王子猷兄弟の如きも亦其言語嘔々として吳楚語を操るを以て爲に一頂群白頂鳥の嘲を免かれず所謂音に楚夏あり是れ土風の乖ける也と左太冲魏都の賦に記せ

る者即ち是れ也故に爾來千五百餘年を歴るも南北言語の殊異なると依然として變せず拙生は支那言語の學に於て能く其詳を知る者に非ずと雖も聞く所によれば現今支那に行はる所の言語は通計五十餘種の多きありと云ふ………此五十餘種と云へる者は

北は滿洲蒙古西北は西藏南西は苗子貉獠等の言語迄も包含せる者なるべき乎今單に中央支那に就て之を大別すれば南話北話の差別あり即ち江邊語(吳楚越蜀等)と河邊語(燕趙魏秦齊等の方域)との大差別あり而して彼此相通用せざるとは歴然として明かなり

願ふに言語は實に交通の最要樞機たるは勿論にして國民統一の要素たり言語の統一無きものは其國國性決して統一せず支那國內の統一せられざる所以即ち異心異性の人民彼此相猜ひ相嫌ふて而かも南北互に相胡越の念を抱く所以の者は他無し其言語の不通は最も有方の原因たり

然り而して政事の變遷も亦此南北二分子の差別あるを窺ふべし蓋し三代の帝都は全く黃河の近傍に成立せるものにして禹貢九州統治の事は未だ信を措くに足らず當時聲教の被及せる所は僅かに支那北方河邊に止まりたと略は推料すべき也姬周の初世五服の制あり要服は王畿を距ると僅かに二千里にして夷狄之領地たり如之井田之制の如き單に河邊の幾部

分に行はれたるのみ南方にも西方にも絶へて行はれず「春秋の時に及びては南北の對峙軋轉すると彌よ加はり吳楚の勢始めて盛大にして就中楚國は進みて北方を歴し周鼎の輕重を問ひ列國諸侯の盟主と爲るに至りしなり

秦始皇天下を併呑し六國の後を亡せりと雖も楊子江東に遺存せる所の楚王の後胤を殄滅すると能はず秦政の威力は吳楚に加ふると十分ならざりしを推知すべし祖龍一たび瞑目して三戸の楚人果して蹶起し江東の子弟即ち八千の楚人西に向て長驅し以て秦を亡したる者は其れ豈に偶然ならんや

然れども當時天下の勁兵銳卒は尙ほ多く北方河邊に在り加之北邊には支那の最も大患たり強敵たる匈奴冒頓なる者あり故に支那政事の中心を建るや河邊に於てせざるを得ず殊に關中金城天府に於てせざるを得ず故に天下の豪傑十万家を咸陽に移植せしめ漢家四百年間の宏業を河邊に維持したり吳楚七國の叛ありしと雖ども踵を旋らさずして河邊の爲に逆擊征服せられしは怪むに足らざるなり既にして東漢の末に及びて江邊の勢力大に發達し始めて三國鼎峙の活劇を演せしも亦終に北方の併はす所と爲れり六朝の風雲は忽ち激して支那全土を擧げて雷擊電掣龍躍虎跳の境界に陥らしめたるか故に其結果は黃河と楊子江との兩水

を。して。正。さ。に。相。混。同。合。流。せ。し。む。る。の。機。會。を。生。じ。たり。此。機。會。に。乘。じ。て。能。く。三。國。割。據。以。來。五。胡。の。猖。獗。六。朝。南。北。の。軋。轢。よ。り。生。ぜ。る。所。の。精。華。を。抽。集。し。以。て。支。那。古。來。未。曾。有。の。新。機。軸。を。發。揮。し。たる。者。を。李。唐。と。爲。す。國。家。の。構。造。也。文。物。也。學。藝。也。美。術。也。元。氣。磅。礴。精。神。凜。然。と。し。て。其。内。に。充。滿。し。光。彩。燦。然。と。し。て。外。に。輝。や。き。尊。嚴。高。雅。實。に。今。古。に。卓。越。せ。る。唐。代。の。文。明。は。他。無。し。黃。河。的。分。子。と。楊。子。江。的。元。素。と。を。混。同。調。和。せ。し。め。たる。機。會。と。機。運。と。の。結。果。の。み。

然れども塞外突厥回紇契丹の類支那の北邊を窺ひ苟くも小虛隙の乘るべきあれば則ち猛烈然として之に乗するか故に河邊に屯するに重兵大軍を以てせざるを得ず國都即ち國政の中心は依然として關中に在らざるを得ず唐朝の初は此の如く盛大なる文明を効せりと雖も天寶大亂以後に至りては則ち其江邊河邊兩元素混化の妙機を亡失し河邊の要鎮魏博を始めとし燕趙韓幽並の要地精銳兵馬の在る所は唐朝叛臣亂民の巢窟と爲り而かも之を制すると能はず是に於てか河邊分子と江邊元素との調和既に破壊し之に次ぐに五代の亂離を以てし石敬瑭の大失策幽燕十六州を割き之を契丹に賂ふ故に支那の中心は終に動搖轉變して其南方に傾むき天津橋上杜鵑の泣血は果して宋社南遷の一讖聲と爲りしも偶然に非る也」故に宋は楊子江の代表者と爲り乃ち單江邊の代表者にして支那全部の代表者に非る也江邊單獨の力

を以て北狄の南侵に抗する能はざるは固より理勢の當然なるが故に遂に困しめられ金に辱められ徽欽二帝は蒙塵して沙漠の外に崩し之に次ぐに崖山妖血を以てす南渡偏安の夢は長く楊子江邊の殷鑑たり元代は北狄侵入の餘に出て支那固有の人民をして壓抑の下に屈せしむ而かも其本據は漠北に連絡するの必要あるを以て河邊と江邊とを混同統括するに違まわらずして亡びたり明は江邊より起り國政中心を江邊に建設せむとしたるも忽ち燕王北方勁兵の叛亂あり隨て永樂帝は北方に都を遷したりと雖も是れ亦強敵の漠北韃靼蒙古に在る者を畏れて之を防ぐか爲め豫め力らを北方に專注せる者也故に河邊と江邊との兩分子を調和活動せしむると能はざりき

明を亡ぼして之に代れる者即ち滿清も亦燕京に據り河邊の代表者たるに止まり支那全部の代表たるに足らず

之を要するに古往今來支那政事上に於て能く其河邊と江邊との兩分子を混同し以て之を活用し得たる者即ち能く支那全部を代表し得たる者は唯唐代初盛の時に在るのみにして而かも其他時代には殆んど之れ無き也

右に歴述せる如く山川風土と云ひ生活上と云ひ言語と云ひ人種と云ひ政事的と云ひ支那其

者の通性は果して何の處に在る乎之を捉らへむと欲するも得べからざる也即ち言を換へて之を言へは南方的支那あり或は北方的支那あり彼處には黄河的支那あり此處には則楊子江的支那あり雖然一貫せる支那なる者無き也故に曰く支那の通性無しと

夫れ一以て之を貫きたる所の支那を畫き出すと極めて難し故に此國の文化也美術也も亦其現象錯雜にして江邊と河邊とは大に其趣味を殊にす恰かも彼の歐洲に通性無く其中原に於ては獨逸人と拉丁人と彼此對立して以て歐洲を成せるか如く支那に於ては江邊と河邊との雙方元素が成立して相對峙する者ある也而して其現象の支那美術に顯はれ來れる者を考察するに大別して三様あり三様とは何ぞ曰く第一に秦漢以上の美術第二に宋以後の美術第三は唐代盛時の美術是れ也

蓋し平原廣野に棲息し外物の激變に遭ふと極めて稀れなる者は規矩整然たる理想を生ず故に彼易理の卦爻に於る周官の制度に於る井田の法制に於る周人の思想は雍州陝西地方の山水に化せられたる者多きか如し秦漢亦然り就中漢儒の事を論し理を講するや常に五行に拘泥し又春秋を崇拜し百事一定不變の規矩を尙みたるか如きは長安或は洛陽の山水風土に化せられたる者の如し之を外國の例に比喩せむ乎秦漢以上の美術は（此時代の古器物にして

遺存する者は寡少なるが故に充分なる證據を立て難しと雖も猶彼埃及古代或は彼の亞西利亞美術の如く其構思と云ひ體裁と云ひ莊重なれども變化に乏しき性質を有するが如し之と正反對なる者は宋元明の美術也とす」宋人は其文學と云ひ其哲學と云ひ共に漢儒の範圍を脱して一つの新門戸を開き老佛を折衷して之を儒學に混和し以て哲學的進歩を促かし變化無極の才を以て幽玄なる理氣の關係を探究し議論縱横又議論理想彌よ深く議論彌よ多し宋人の議論に於る殆ど周末戰國諸子百家の巧辯劇論を逞ふしたる者に殆んど彷彿たり隨て其美術は秦漢範圍の外に超脱して別に一種の式を具せり南方の士大夫晚年多く好みて佛を學ひ北方士大夫晚年多好學儒と宋時學士大夫殊に然りし者の如し美術に於ても亦然り三代の彝器は莊重典雅整正なるも宋は則然らず江邊天然を愛するの情に富み楚辭の思想（離騷の類）洞庭大湖の氣象の如き天來の妙致神韻は識らず知らず宋人の繪畫に發顯せられたる者の如し故に李龍眠夏珪馬遠等名家の筆端は空前絶後の妙技を發揮し以て天然の高趣を抽象し着想の超脱清高なる意匠の幽邃爽淨なる眞に東洋の特色たり豈に絶妙と謂はざるべけんや而して元人は之に則どり之に模し明清は之か糟粕を收むるのみ

宋と秦漢以上の美術を對比すれば彼此相異なる此の如し而して此兩者の仲間に立ちて別

に卓然たる特色を保てる者は唐代の美術也唐の美術は其神理と其風格との配合極めて善く其適宜を得たる者にして秦漢にも非ず宋元にも非ず雄大にして而かも巧妙を兼ね勁拔にして而かも温雅を含む誠とに江邊河邊の兩元素を混和して之を發揮し得たる者にして唐以前にも其以後にも共に比倫すべき者無きが如し是れ拙生一己の疑問なるが故に尙ほ諸君の教を請むと欲する所也」………

第二に拙生か深く感したる所の者は何者なる乎他無し支那と歐洲との關係是れ也是より先き從來日本に居て之を考察する所によれば支那と歐洲とは著大に殊異なるものと云へる感覺を吾人共に抱持せざるは無し然るに其内地に入りて審かに之を按察すれば支那は寧ろ日本よりも歐洲に近き所の者多きが如し例へば洛陽城畔暮色蒼然夕陽滿地幾百の羊群若くは山羊群を驅りて長鞭を揮ふ牧夫か馬に跨りて歸り來る處を望み偶々頭を回らして古城殘壞し磚瓦地に委ぬる光景を目撃する時は此身は恍として羅馬城邊に在るの思想あり其思想たる羅馬城外に佇立してカムバニア(伊太利の州名にして其區域内に古今有名なる歴史的の戰場或は都府名勝及び大寺院等多き地方なり現今該區域内の人口大約二百九十餘萬人なり)地方の雲を望める時の思想と恰かも相同し此時に當りて洛陽城外洛水の流に對する懷古感時の情は羅馬城頭ナベル河流に臨むの情と異なる無き也」且つ支那人民の生活は日本

と大に相差異ありて其歩するや靴を以てし其食するや卓子を以てし其居住するや煉瓦磚瓦を以てする者なるか故に其生活は西洋人と近似せる者多きを覺ゆ歐洲人古來支那人と關係の事に就ては諸説未だ定まらずと雖も大古に於ても上古に在りても支那と歐洲との交通ありたる事迹は往々稽ふべき點あるか如し「歐洲の支那學者は支那の古文字とカルデア地方に於て發見せる古代の象形字と彼此其跡を同じふせる者ありと謂ひ以てカルデアと支那三代の文化とを同一源に歸せむとするの説ありと雖も是其説たる牽強附會の頗る太甚たしき者にして吾人か遽かに同意すべからざる所也とす

漢の時に至りて張騫か西域に使し羅馬の歴史家亦支那の事を記せる者其書中に散見するを見れば中央亞細亞か印度かを經由して東西大陸先進國の間に彼此聲問を通したるとあるを推知すべき也山東省紫雲山の武梁祠に在る石刻の古物中には分明なるアッシリア式の品物現存せり唐の貞元年時(我國桓武天皇の御世にして恰かも今より千年以前に在り)ネネトリア國の耶蘇宣教僧侶か印度を經過し唐に入り其教を宣布したるとき建設せられたる耶蘇教の碑石は今猶斯に現存す又回紇人(一名畏兀兒或は回鶻の唐に入りて歸化せる者數万人皆之を諸道に分配雜居せしむ)唐の元和二年正月回紇の請願を裁可し河南府及び太原府に於て

摩尼寺を建設し其徒の禮拜を許す。(唐憲宗元和二年は我が大同元年平城天皇即位の歲にして今を距ること千〇八十八年以前に當る)當時唐朝に於て佛教隆盛なりしと共に亦其傍に歐洲より輸入せる耶蘇教及び中央亞細亞より侵入せる所の回々教をも寛大に允許して其禮拜を行ふとを公認したるを推知するに足れり而して唐以後は歐洲との交通漸く其端を發し元に至りては益す其交通を増加すべき事機に際會せり

(冊府元龜に曰く開元七年(唐玄宗)吐火羅國王上表して天文に通せる人大慕閣なる者を献す曰く此人智慧幽深にして博學洽識問ふとして知らざる無し伏して願はくは天恩之を喚召して問ふに諸教法を以てせられむとを此人如是の藝能あるを知らば請ふ之を一法堂に置かれ以て本教に依りて供養せしめられむとを云々

吐火羅國なる者今其何國なる乎を詳にすべからずと雖も此上表文を味ふるときは耶蘇教徒或は回々教徒其教を漢土に宣布せむが爲に其高僧中材學兼秀殊に天文曆術に精通せる人物を選みて以て唐に入らしめ朝廷の公許法堂を開設して其宣教の目的を達せむとを謀れる者たると知るべし而して玄宗の朝廷之を採納せしや否やを知らずと雖も當時有名の將軍郭子儀が晩年に至りて深く耶蘇教を尊崇し之を保護したると

亦史傳に散見するを以て之を推すとときは耶蘇教徒回々教徒が唐の中葉に於て支那に浸入し支那國內大亂の虛に乗じて以て布教の働きに從事したる景況を想ふべし

路易十四世が支那皇帝に献上したる品物は今猶北京に遺存せり其他明以後に及びて歐洲より輸入せる事物は天文曆算を始めとして尠からざるべし故に支那と歐洲とを全く分離して其美術を論ずるを得ざるべし茲に今拙生が感ずる所は他無し西洋の學者が文化の消長進退を研究するに當りても必ず先づ其自國と云ふ觀念を懷抱して而後之を研究せざるは莫し然れば美術に就ても其自國を以て主幹とし根本とし而して西洋から溢れて外國に向て流傳せることを研究するを以て主眼と爲す者の如し然るに東洋の學術文物が發達して外に溢れ以て歐洲に被及したる點に關しては彼れ歐洲學者は極めて冷淡にして風馬牛の觀を倣す故に此の大闕缺を救正するか爲めには我東洋の方面より吾人躬親から十分之を研究せざる可らずと云ふこと是れ豈に緊要の問題に非るを得んや」例へば彼馬哈默度が亞拉比亞に勃興し亞拉比亞人の勢力大に振ひ西に向て埃及及び波斯を征服し更に進みて地中海頭に横行し西班牙を占略したる功勳偉業は今に遺存して不朽に垂るる者あり(亞拉比亞回教徒が西班牙を征略したるは西曆七百十一年に在り當時回教々主の權勢は西は大西洋岸より東は印

度に至る一大方域に盤踞擴張せられ其首都京城バグダッド府の壯大なる建築は西曆七百六
 十三年(我天平寶字年間)を以て成功し當時東方の開進文化及び商業の一大淵藪たりしと云
 ふ)然るに沙漠中の蠻族たる亞拉比亞人が突然として此の如き美術を造り出し得べきの理
 無し其美術の型式が支那の古代に見ゆたる者にして其後移りて印度を経て亞拉比亞に傳は
 りたる者も亦應に多かるべしと吾人は想像す又煉瓦の型式等の如き物の中にも最初其源
 を支那に發して印度を經亞拉比亞人が之を齎らして西洋に埃及モロッコ等に傳へたる者を
 以て其基範とし而して西洋人が其後此型式に模倣したる者に非る乎吾人は之を疑ひ且其或
 は然らむとを推料す」其他にも猶此の如きの類多々あるべしと雖も時間限りあるを以て今
 之を略す之を要するに亞細亞を以て主體と爲し歐洲を以て客と爲し而して我より彼に向て
 之を推及したる系統を尋ねて以て之か源流の關係と其沿革變遷の迹とを考究せば則古代亞
 細亞の文物文化が遙に歐洲に傳はりて彼の文化に影響を與へたる者は蓋し應に多々なる
 べし是れ吾人が推料する所にして日本の研究者が將來大に其心を用ひ力を盡くすへきの要
 務なるを信す

第三に感したる所の者は日本と支那と美術上に於る交互の關係也日本の美術と云へば從來

文明之祖
 在亞細亞
 此處一
 倉學士
 研究要
 大要務

何人と雖も我美術の淵源を總へて支那に資りたる者の如く思料するを常とす願ふに古來支
 那より傳來せる者は實に夥多しきとにして日本萬般の美術其源を探求すれば三分の一位は
 其型式が支那に在ると言はむも亦可也然るに拙生今回支那旅行に於る(僅々短日月の觀察
 故に)敢て遽かに論斷を下すに非すと雖も聊か以て人意を強ふするに足る者ある所以は他
 無し「日本美術之獨立……………即ち前途日本美術が必ず獨立し得らるべきの望み確實
 明白なると是れ也其故は日本の美術は本來決して支那美術の一枝脈一分派の者に非るを以
 也精しく之を言へば日本美術は從來之を支那に資れる者多からざるには非すと雖も其固有
 出色の特性なる者は支那以外に存立せり而かも其特別出色の點は支那傳來の點よりも多し
 とす故に支那の影響を受けたる處ありと雖も能く之を變化し之を脱胎し以て明かに日本の
 日本たる美術の特色獨立を證明するに足るを以て也」即ち今日まで支那本國に遺存する所
 の現品及び秦漢唐宋元明各代の美術品日本に舶來傳存せる所の現物に就きて以て日本美術
 の發達し來れる事歴を回觀すれば則支那は自から支那たり日本は自から特別獨立の日本た
 るとは明白に其美術品上に顯はれ而かも決して疑を容るる所無し復た何ぞ愛とすに足ら
 んや抑も日本人は實に美術の特性を固有し以て能く之を發揮したる者也然り而して其特性

其美術的獨立なる者が他の妨碍を被むると無くして以て能く發達したる所以の原因は固より一二に止まらずと雖も其主要なる一つは支那との交通の不便に在るか如し若し其れ然らずして我國支那と陸地疆界互に相接續する乎或は然らざれども彼此交通をして一層親密頻煩ならしめたらむには之か爲に支那の影響を被むると應さに夥多なるべき也果して然らば我國美術の獨立なる者亦安んず其危ふせる所と爲らざるを保たんや豈に深く察せざるべけんや」唯其れ然らず皇國と支那とは之を隔つるに西海の險を以てし彼我交通の不便なりしか爲に日本美術の獨立をして一層大に發揮せしめたるや明らか也」此交通の不便なるが故に古來日本人は支那を買冠れると太甚たしく支那の文章を信崇すると殊に太甚だしきを以て支那の事物は皆其文章の如く華美秀麗高雅なる者ならむと信認したりしなり此の如く非常に之を買冠り之を尊崇せる所の思想を以て更らに奮て彼を凌ぎ彼に競はむと欲し自から日本美術を發揮暢達せしむるに於て熱心に勤勉刻苦を積みたるか故に其積累の結果として日本美術は遂に今日の如く特色獨立の域に達したる者に非ずして何ぞや」尙ほ此點に關して意見の在る有りと雖も言長きに亘るを以て請ふ之を他日に譲り而して今日支那に現存せる所の古代美術品に關し聊か一二の管見を左に述べむ

支那の美術品と探究するの端緒

全 上

「支那の美術」と云へる題目もて講演せられたる岡倉學士の講演の速記録と爲り同君の校閲を経たりしが其速記文を潤正して一編の今體文に改修せられよ」と云へる同君よりの指託に従ひ之を今體文(拙劣を顧みず)に更修せり前に載する所は即ち是れ也

然るに同君講談の末段に於る「支那美術遺存品探究の手段」に關する者は之を今體文に更めるよりも寧ろ原談の儘即ち速記の儘に載録する方趣味深かるべしと覺ゆ故に之を分割して別に一編と爲し以て左に掲ぐ同君の亮想を請ひ且つ看官の亮察を仰ぐ

明治廿七年三月

編 者 謹 識

茲に支那内地に入りて各省名勝舊蹟を訪尋し而して其の古美術の遺存品を調べるに就きては其所在が三つある他無し即ち第一は其所藏家に就て見ること、第二は公共の所に就て見ること、第三はそれを以て商賣にして居る即ち骨董店に就て見ることでありあります

所藏家に就て見ることには此度色々の人の厚意を以て極めて之を努めたであります

支那の美術品を探究するの端緒

が支那は誠に外人に接することを忌む人種であります。在留人中十年の交を結んで居りながら未だ其人の家にも招待されないことは幾らもあることであつて随分名家の紹介を以て往きましても餘程の改進黨でなければ人に物を見せることを承諾させぬそれで或は一月居つたら見せるか二月居つたら見せるかと云つても中々面倒で到底此度の百四十日間の旅行で其暇を費やすことは出来ませんから専ら力を他の二方に注ぎましたのであります。必竟從來支那に於ては美術品がないないといふ人が申すけれども能く其所在に就て將來鑑識に富んだ人か時日を費やして見たならば支那の所藏家中に非常の物があるだらうと思ひます。骨董店に就ては申すまでもない誰れも見ることです。か公共のものとしては支那には博物館がござりませぬから差向寺の物に就て見るのであります。日本でも寺院が矢張り美術の淵藪でありますから専らそれに就て見ました。

支那に於て美術品を亡ぼした原因は随分多いことで其重なるものは兵亂であります。支那の兵亂は實に激なものであつて丁度羅馬がカルセージを亡ぼす時に其煉瓦や瓦を重ねて置かないと云ふやうに比々到る處物を毀して仕舞う。現在亂後の城を一つ見ましたが只た城の壁が相對して城は只た四壁と云つて宜いものであります。其外は皆な麥畑になつて居りまして

すつかり毀して仕舞つた大抵寺は城の近所にあるものであるから亂に遭ふと中の物を掠奪され又打毀はされることは夥多しきことである。又佛教は我國に於ける如く非常勢力を得て居らない。歸依の天子の在つた時には非常な盛んになつたこともありましたけれども之なき時には佛像を鎔かして錢にするると云ふこともある。寺院の寶物の災を受けたことは前後少ないことではないのであります。且日本と違ひまして今日の支那の佛教は専ら禪宗であるが爲めに佛像の方に力を入れないのみならず維持の上に於て繼續の觀念が少ないものであります。すから自然亡び易い譯であります。而して支那人は元以來只た自分の身を護るに汲々して居りまして公共の爲めに力を盡くすことが少ないものであります。すから従つて寺などの維持に於て力を盡くすことも少ない。又佛教も今日に在ては儒教と老子の教と三つに天下を分つて居る位であります。すから其勢力も誠に微々として實に情けない有様であります。か残つてあるものを見ると其規模と云ひ製作と云ひ實に非常な物が有る色々あります。か今此所で御覽に入れますのは龍門山の石像であります。龍門山は河南府を去ること支那里數二十五里の所であります。伊川と云ふ河を隔つて一方は香山一方は龍門山なり。香山は白樂天の遺蹟で今に香山寺がござります。其山に刻んである所の佛か通計二万有餘大は五六丈の石佛で其他或は二

丈或は三丈小さいのは一尺五寸位であります其工事は北魏から唐の中比に出来たもので其所に往つて見ますと其時代に於ける變遷を明かに見ることが出来ます刻んである中に石室が總牀で七つあります先きに申しました紫雲山の武梁祠ホウリョウジンに續いては此石室の如きは美術の沿革上最も貴重すべきものだらうと思ひます又それを支那以外に公けにすることがなかつたと思ひます或は此度寫眞を取りましたのが初めだらうと存じます其寫眞を今此所で御目に懸けます(幻燈を示す)此れは薄暗く寫つて居りますが石室の中てありますから光線が不充分で寫眞が明かに取れませぬ是は最も古い部分でありますか諸君が能く記憶して居られませうが奈良の法隆寺の金堂に在る鞍作鳥の作と申す釋迦三尊等の趣が明かにあらうと思ひますあれと此れと比較して百濟式と云ふものは百濟になくして其實は支那の而も洛陽あたりまでも奥深い所から來たと云ふことが能く分る譯であります是は御覽の通り精巧のものではない手なごも大きく顔なども美と云ふ所に至つて居りませぬが沿革上から云へば誠に貴い物であります一丈二尺位ありませう誠に見事な物であります尙ほ他の佛もありません(幻燈を示す)此れは其中に居る釋迦でありますが今の佛に比すると幾分か時代が後になりませう我朝では西の京の藥師寺の三尊などの式と少し前位の物に見えます前者より幾分か

進んだ所が見えます斯う云ふ風の式の發達が明かに此れで徴することが出来ます尙ほ此外に唐となつた所の大佛があります此れは六丈計りありて非常に大きな物で先き程御覽になつた物とは大に違つて身體の釣合から頭の釣合が餘程熟して見える誠に微妙な顔になつて居る是等は蓋し唐の石刻品中に於ても亦有數の物だらうと思はれる斯う云ふ風に一の崖の上で佛を造ることは印度に重むにゐることで印度に於ては處々の山嶺の岩を切り抜て寺を拵らへた所が能くゐると云ふとを聞きます而して此の如き石刻の風が支那にも輸入して六朝から唐の時分に至る迄最も流行つたものと見える尙ほ龍門の外に廣元縣の千佛崖に至れば非常の石刻がある(幻燈を示す)此れは一つの山の崖です其崖を幾つにも掘つて斯う云う佛を鑿り抜たのである六尺位もありません中々大きな物で此下は嘉陵江の水が滔々と流れて居る是は唐の開元年中に劔南の按察使意杭イコウと云ふ人が此道を開いて併せて功德の爲めに刻んだ物でちやんと時代が分つて居りて研究上に有益な物である尙ほ此中に光緒三年の地震の爲めに地上に落ちた物がある地上に落ちれば此位の大きさになつて居る御覽の通りの物で(幻燈を示す)中々顔貌でも形状にない物ではない斯う云ふ所が澤山あります送險亭の脇にもありますし又凌雲寺即ち東坡が住んだ東坡樓にも其所には蜀の僧の海運が拵らへた

二十丈と云ふ大きな石の佛があります是れが實際見た所でも十五六丈は必ずあるだらうと思ひます殆ど一山の山です頭に木が生へて居ります其木が丸で螺髪のやうに見えます其脇に韋馱天がありますが大丈位の物が小さく見えます其所は大江の波の非常に強い所で寫眞を取るとは出来ませんでりました扱此種の物が六朝からして唐にかけて随分行はれたと云ふことを見るに足りませぬ尙ほ記すへきものは長安の碑林であります諸君も御承知の通り此碑林は宋時分に城の内外に落ちてある所の石碑を集めて一所に合せたものであります石刻の十三經からして色々の物があります千幾らと云つて一つの所に碑かあるそれが總て有名な物計りであります碑を摺つて生活する者が三十何軒とありますが其所に至ると只た馬籠の音刷毛で打つ音が入釜しい位であります此間に天下の法書が磨滅するのは惜いことでもあります其盛んな所は見ることが出来ませぬ書家などの購求することがあつて大抵の物は日本に參つて居りませうが碑に注意すべきは字計りではない彫刻が非常の物でありますそれは恐らくは寫眞になつて來て居るものありますまい(幻燈を示す)此れは碑林中のものはありませぬが昔唐天子が進士に宴を賜はつた慈雲寺の雁塔の中に嵌めてあります褚遂良の聖教の序の碑であります真中に釋迦なり菩薩なり天神なりがずつと付て居ります龍は我が

興福寺の華嚴龕などの趣があつて如何にも愉快な物であります此れには永徽四年の年號があり考證高尚になつて有益な物であります尙ほ其下に歌舞の菩薩が付て居ります其面部は毀したものと見えますが此時の式か今の我法隆寺の欄間にある天人などの式に似て居りまして餘程參考になる物であります尙ほ其外寺に在る彫刻物に見るべき物が幾らもあります長安の寶慶寺(サツシ)に在る佛の如きは實に見るべき物であります此れなどは矢張り唐の製作でありますが誠に見事に出來て居るものであります壁の間に斯う云ふ物が塗り込んであるのが二十何枚ありました(幻燈を示す)大鉢支那の寺は無住が多い百姓家になつて居りまして前に麥の刈つたのが積んであつたり此れ等を剝がして見て始めて結構な佛が出來るやうな譯であります或寺には肥料が一杯あつたり肥料の中に銅像などがある誠に情けない有様であります又十一面の佛があります此れは誠に奇麗であります其の他に色々な物もありませぬ鶴林寺に往けば元時分の僧侶の彫刻物があるし栢郷縣の脇などには銅像が道の端に立て居たり或は寺の家根が毀はれて其間から銅像の立派な顔が出て居たり黄河の脇には沙が澤山ありますから沙が寺を半ば没して佛の腰邊りまで沙が來て居ります其沙を取り除ければ立派な佛が出る猶一例を舉げれば路傍に石佛の落ちて居る所がある斯う云ふ草原(幻

燈を示す)で堂の跡で立派な大理石の佛像が横はり居る此品取り分け殊に立派な物であります此れが若し外にありましたならば非常に貴重されべき物でありませうが草の中に落ちて居る斯う云ふ物を枚擧すれば到る處に在ります

支那で珍らしい物は塔であります塔は日本流に木で拵らへた物もあるけれども多くは煉瓦で拵らへた物であります(幻燈を示す)此れは天寧寺の塔であります北京から遠くないが隋の時に出来て後追々補ひがおりますか焼物であります誠に美麗で佛像なども付て居ります此れは明時分に繕ひましたけれども大跡は變らない尙ほ長安に在る所の慈雲寺の塔即ち雁塔でもあります粧飾なども大變落ちて居る昔斯う云ふ所は寺の境内で餘程立派であつたのでありませうが今は僅に斯う云ふやうな小屋二つ三つありますそれで宴を進士に賜はつたり何にかしたときにはどの位盛んであつたのでありませうか是れからもう少しこちらに往きますと例の少陵先生杜甫が大に痛哭したと云へる曲江がある然れども其曲江の水は今涸れて居る是れから向つて見下せば樂遊原があります夕方になれば誠に憐れな所である此中に今の褚遂良の碑が嵌め込んであります中に階子がありまして上まで登るやうになつて居る而して其の上に登臨すれば眼底一望長安内外が見える是れは唐の塔である(前に申したる

のは隋の塔である)又趙宋の時の塔は荊州にありて毘盧寺に對し一名は料敵塔と云つて八角の塔でありますが一面毀はれて落ちて切斷が見える其爲めに却て塔の仕組を見るのに面白いかと思はれる即ち皆な登るとが出来るやうになつて居る此の如く支那に在る所の高塔の型式は種々あり之を大別して三通りもある尙ほ之を細別すれば塔の種類が澤山ある其他安肅縣の境に在る白塔村の境の磚塔があります金時分の塔で少し式が變つて居ります此れは焼き物で色々粧飾が付て居り形も宜い形であります其の他元時分の物もありましたが明の永樂帝の建てた居庸關の石門が在ります此れは佛像が刻んであるのであります此所は四天王だの何んだのあります此れに付て支那西藏梵語等六ヶ國の語を以て記してあるものがあります實に大永樂帝の業として見る可きであります餘程規模の大きな物で此れに付て居る四天王の石刻があります明でも此の如き物がありますから只だ脊の低い縮りのない彫刻のみではない北部の明と云ふものは此の如きものがある其故は他に非ずして北方支那は西藏だの蒙古だのの勢を受けて居るから所謂南方の式とは大に其趣を異にして居る故に是等の石刻品四天王の力量鬼などの姿も誠に宜く出来て居る此の上は皆佛であります(幻燈を示す)尙ほ明の製作では此れが安國寺と云つて河南府の寺に在る塑作の一例であります明

の物は御承知の通り頭が大きくて足が短かい北部の方は頭も小さい大鉢の所は明と云ふ證
 據はありますか通常の明とは餘程違つて居ることが分りませう(幻燈を示す)此れは明の十
 三陵の一なる永樂帝の陵であります此欄干は悉く大理石であります此中が丁年二十丈に入
 丈位ある非常に大きな物であります中に馬が飼つてありまして今は人も居りませんで斯く
 荒れ果てゝありますそれから今日の清朝に這入つてからの製作で多く見るに足りませぬけ
 れども尙ほ今日の物を窺ふ爲めに御覽に入れるのは長安の孔子廟であります(幻燈を示す)
 前に香爐があつて此中に位牌すつと并んである誠に孔廟たるに背かない奇麗に残つて居る
 所であります此趣と廣東上海天津などの近所とは誠に違つたものであります支那は決して
 一概に論することは出来ませぬ

それで大鉢支那の物に付ては御覽に入れたが尙ほ此所に御覽に入たいものが少しあり別な
 物でもない日本の美術であります中には支那から來た物もござりますけれども日本の美術
 を發揮した本であつて先刻申しました日本の美術と支那の物と大に異なる所があつて決し
 て恥る所はないと云ふ所を諸君に申上げたい爲である(以下略す)

叢書 支那彙報 畢

明治二十七年六月廿五日印刷
 明治二十七年六月廿八日發行

定價金五拾錢

發行所

東京市神田區一ツ橋通二十一番地

東 邦 協 會

編纂者

東京市麴町區一番町二十八番地

山 中 峯



印刷者

東京市神田區錦町三丁目八番地

八 尾 新 助

發賣所

東京市神田區表神保町一番地

八 尾 書 店



東邦協會發行

(明細地圖入)

東邦叢書 **朝鮮彙報**

全一冊

正價金五拾錢
郵税金六錢

本書ハ露韓ノ關係朝鮮論朝鮮ノ現制並ニ日本トノ關係ニ於テ東亞ノ大勢ヨリ朝鮮ノ獨立及

隣國ノ關係等ヲ最モ痛快明瞭ニ講論シ朝鮮西岸ノ水路朝鮮探險ノ結果朝鮮紀行義州紀行朝

鮮ノ外國貿易附漁業ノ景況等ニ於テ其地理風俗人情ヨリ通商貿易ニ關スル諸項ヲ精細確實

ニ記述シタリ今ノ時ニ當リ我國人タルモノ一讀以テ大ニ企圖スル所アレ

伯爵松方正義君副島種臣君序
子爵河野敏鎌君序日清貿易研究所編纂

清國通商綜覽

全一冊

總クロース美製
正價金七圓

參謀本部編纂

東亞各港誌

全一冊

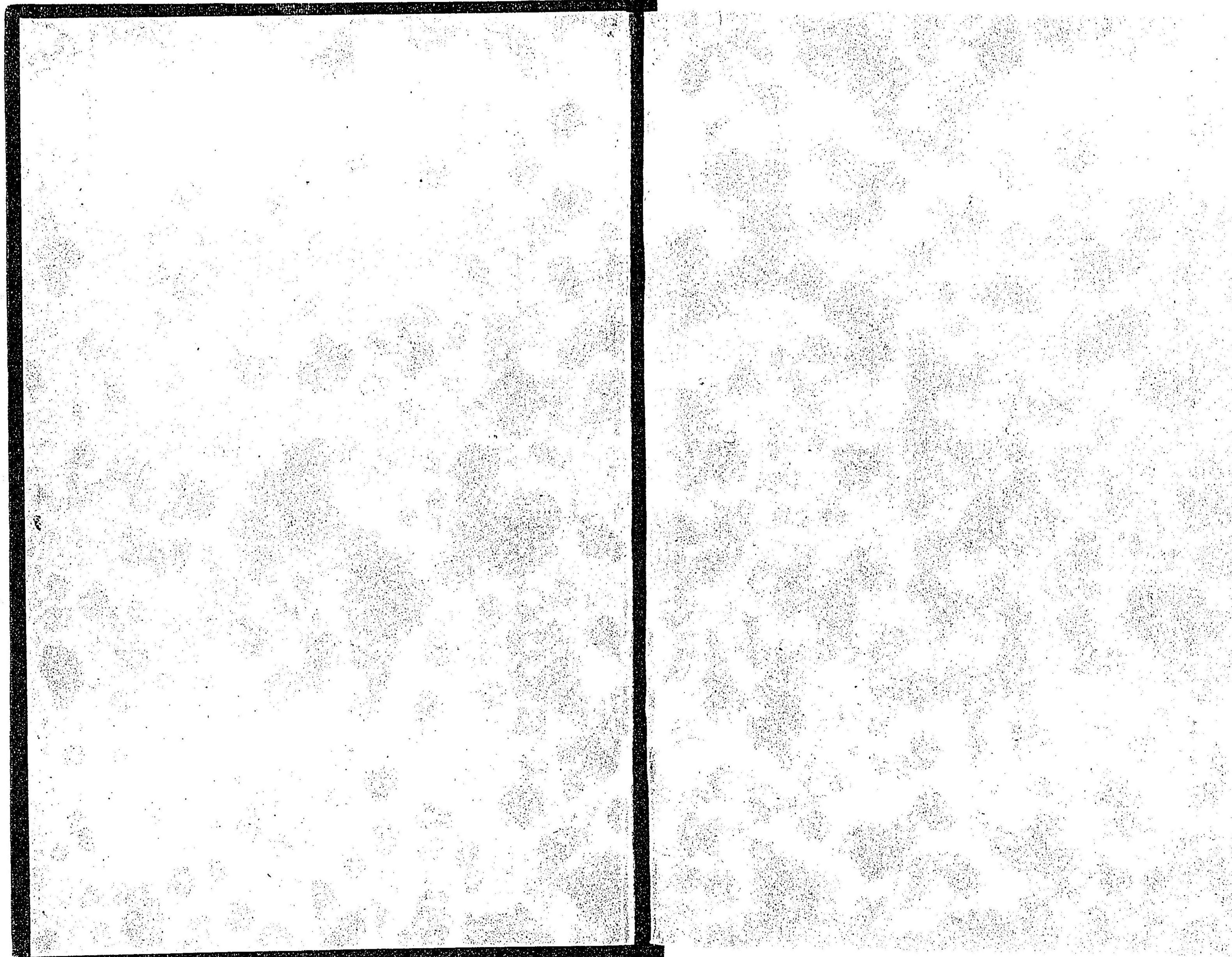
正價金五十錢
郵税金八錢

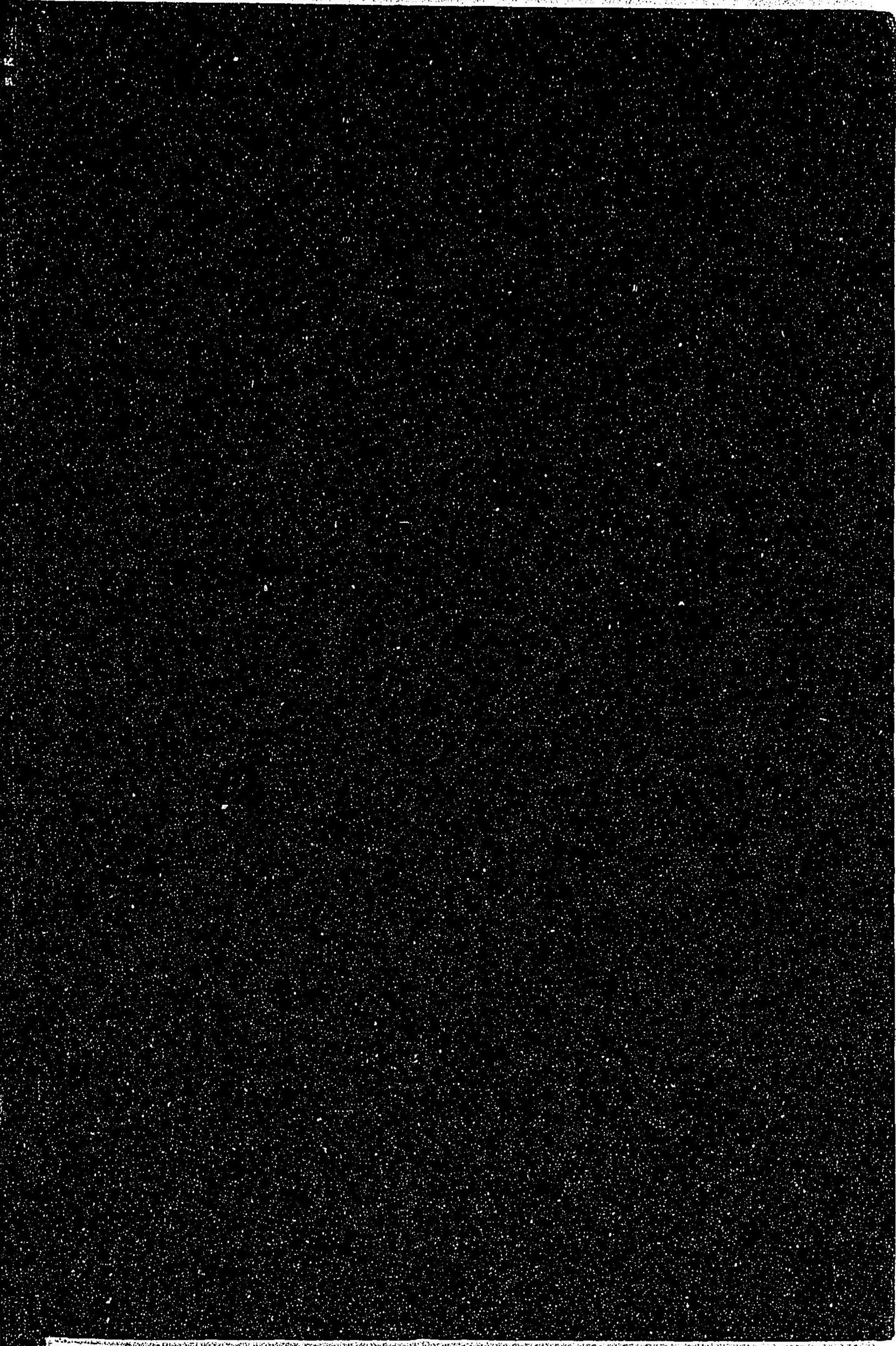
支那地誌

蒙古ノ部
全一冊

正價金五十錢
郵税金四錢







Faint, illegible text visible on the left side of the page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is arranged in several lines and is too light to be read accurately.

Faint, illegible text visible at the bottom of the page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is arranged in several lines and is too light to be read accurately.

102132-000-5

O 4 1 - T O 3 8 7 s

支那彙報

東邦協會

M27

EAF-0124



